

氏名（本籍）	フクシトモコ 福 士 朋 子（青森県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博 美 第 139 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位論文等題目	作品 Locci シリーズ 論文 境域をうつす絵画《絵画 - マンガ》往環による多視点・意識・身体の考察
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 坂 口 寛 敏
（論文第 1 副査）	” 助教授（ ” ） 布 施 英 利
（作品第 1 副査）	” 教授（ ” ） 櫃 田 伸 也
（副査）	” ”（ ” ） 佐 藤 一 郎
（ ” ）	” 助教授（ ” ） 小 山 穂 太 郎

（論文内容の要旨）

この論文では、絵画とマンガとを往還し、比較検証することによって、私の絵画制作における多視点、意識、身体のあり方と、それらの関係性と境域について考察した。私は絵画制作と並行してマンガを描いている。現在まで絵画制作を主としてきたため、マンガを描くことを絵画制作とは完全に切り離して考えてきたが、同時にそれらの相違や、融合の可能性には常に興味を覚えていた。私が美術の道に進み、絵画制作を行っているのも、幼少の頃からマンガを読み、模倣して描き、マンガ家になることに憧れたこともひとつの要因である。マンガは長い間、芸術や文化としては認知されず、サブカルチャーという一段低いメディアとして扱われ、未だにマンガを読むこと自体を蔑む風潮もある。一方で、既に多数のマンガ評論によってアカデミックな場では日本独自の文化のひとつとして確立され、「MANGA」として世界的にも通用し、流通しているのが現状である。

私の絵画制作を解説するとき、美術史や絵画の制度から制作する場を認識したり、あるいは私自身の感覚を掘り下げて言語化する作業だけでは説明しきれないことに気づく。私のこれまでに受けた美術教育は、近代以降の主体の解体と、それにともなう主観の表現、視覚と触覚の分離を前提としているが、私の成長過程の知覚と意識、言語感覚や空間把握、主体の獲得への影響も、同時に考察する必要がある。そして、私の自我や世界観の確立においての影響を無視できないマンガが浮かび上がってくる。それは、絵画の領域へ、マンガの「イメージ」ではなく「構造」や「文法」を持ち込めないかという希求へと向かう。この論文において、絵画とマンガの相違点を論じるのではなく、絵画とマンガを見る（読む）こと、描く（書く）ことが、私の内でどのように共存し、意識されているのかを観察することによって、それらの表現の融合や、相互の技法の変換の可能性について考えることを出発点とし、私と絵画との関係、絵画制作のあり方を考察し

た。

この論文は、作品図録と論攷の二部構成となっている。作品図録においては、論文の対象となる私の絵画作品を紹介し、論攷では、私の絵画制作を裏づける理論を提示する。論攷は三章によって成る。第一章では、マンガ空間において私が身につけてきた知覚方法を認識する。ここでは、少女マンガに焦点を絞り、マンガ空間の主体/客体の入れ替わりの構造を、「内語」という意識の言葉によって研究する。第二章では、マンガ家高野文子の『黄色い本』をテキストに、高野の「視点」の設定法と、読者が獲得する身体意識を認識し、絵画とマンガにおける主体のあり方、視覚、空間の相違を考察し、それらの絵画への変換の可能性について論じる。第三章では、私の絵画制作の実践と理論を元に、第一章、第二章でのマンガにおける多視点、時間、空間把握の論考をふまえ、美術史の流れにおける視覚と触覚のあり方、近代以降の絵画の主体のあり方とその影響、また、原初的な主体の認識段階である「鏡像段階」の理論を元に、私の絵画制作の検証と絵画に関わる私の意識構造、知覚方法とその可能性を考察する構成となっている。

「絵画と私」について考察するとき、私は常に「境界」に佇む自己の姿を遠視する。それは、はっきりと線引きされたような「境界」ではなく、常に揺らぎ、動き、振れ、私の身体や精神のあり方によってはすぐに逃げ、消えてはまた現われるようなものである。私は、私自身の身体と絵画との関係を、作業空間において、様々な距離を持った意識の視点によって測り、位置の変化にともなう画面への身体と視覚との触れ方によって築く。そのために、絵画制作中の作業空間に複数の意識の視点を設定する。それは三つの意識の視点の置き方に分類できる。まず、画面を床に対して水平に置いた状態に働く鳥瞰の視点、次に、その鳥瞰的意識と、画面上に存在し、そこに現われる空間を動き続ける虫瞰的意識とが共存する状態、そして、水平に置かれた画面を垂直に立てたときに現われる意識の視点である。私はそれらを「ひらく」、「ふれる」、「うつす」(/ 「うつる」)という言葉で定義づけ、それぞれの状態において作用し、動き続ける知覚、意識、身体、空間、場と絵画との関係を観察する。制作中の視覚/触覚、身体/絵画、絵画/作業空間など、相互の働く「境界」は絶えず踏み越えられ、支え、補い合い、その現出と消滅とを繰り返す。視覚表現における「境界」を考察することは、知覚/意識、言葉/意識、意識/無意識、主体/客体、自己/他者、そして既に視覚化され分類されたもの同士の、相互の縁がゆらぎ、越え、変化する「境界」の淵を覗き込む作業とも言える。それは、私の絵画制作、表現の動機の原因でもある。この論文では、そのような場を表現行為における「境域」と定義し検証した。